

その手に消えた

崎本智（6）

空模様が怪しくなっていることに気がついて彼女は雨を予感した。先日亡くなった祖母のことを考えながら茫然と窓を見ていた。洗濯機が同じリズムで回る。くぐもった音が響く室内。彼女は林檎ジュースを濁った水のように飲んでいた。緋色の幕がかけられた古いピアノがあった。その上に埃をかぶったメトロノームが置かれていた。彼女は左手にコップをもったまま、指先で戯れにメトロノームを動かしてみせる。左右に振れるメトロノームの規則正しい音。その音が小石のように波紋を立てる。彼女はもっと幼いころに母を亡くした。水泡のようにその頃のこと浮かんてくる。涙がたくさん出て学校を休みがちになってしまった。白い絨毯を敷いた部屋で犬を抱いていた。NHKの人形劇を眺めていた。なかなか雨が降らない冬で乾いた風がいつも窓をたたいていた。誰かがノックしているようで怖かった。サイズが合わなくなってもお気に入り服をずっと手離さなかった。母親というものがいなくなった家には淋しさが結露のように張りついていった。いつもがらんとした部屋で父の帰りを待っていた。少しづつ彼女は独りで過ごす時間にも慣れていくことができた。お腹が減ればよく牛乳と食パンを食べていた。父の帰りは不定期だったがピザやフライドチキンをお土産に買ってきてくれた夜もあった。母が持っていた琥珀のペンダントには蟻が入っていて、ときどき蟻を観察した。都心の住宅街でそんな毎日を過ごしているうちに、とつぜん学校の先生から心配をされた。何が理由だったのか分からない。でも自分が何か失敗をしてしまったからだと思う。父の仕事はいつも忙しそうで樹衣子一人が家にいることが多かった。父は限界を感じて樹衣子を彼女にとって祖母にあたる幸江が棲む宮ヶ浜の家に預けた。幸江は何も言わずに樹衣子の手をさすってやった。柔らかくて冷たい手は樹衣子にとって忘れられない感触だった。屋敷に引き取られて樹衣子は静かに暮らした。学校も家から遠く、友達と遊ぶことも少なかった。その代わり湖岸や群生林のなかを歩いて過ごすことが多かった。犬はホロホロという名前を持っていて、浜辺や原っぱを気持ちよさそうに駆けめぐった。少しづつ色彩が溢れてくる春の兆しも、夏の陽ざしをさえぎってくれる木蔭も、秋の踏み鳴らす落ち葉の感触も、真冬の音もない雪原も彼女の記憶の層となって重なっていった。屋

敷の窓から頼杖をついて変化し続ける保養地の景色を彼女は庭のように愛でた。幸江とはいつも睦まじく時間を過ごし、夕食は樹衣子が主体になって拵えていた。とりたてて料理が上手だったわけでもないが、焼き魚や煮物など幸江の好みに合うものは自然と上手くなっていった。夏になれば歳下の従弟が二人遊びに来ていつもよりも賑やかになり、樹衣子も彼らのためによくハンバーグやカレーなどを作ってあげた。三人で夏休みの宿題をしたり、樹衣子が森や湖畔を案内することもあった。しかし彼女にとって訪問者は良い人ばかりではなかった。何か用事があつて親戚が屋敷を訪れたときに、樹衣子ちゃんはいね、などとと言われることにねっとりとした不快感を持った。何がえらいのかも尋ねぬままに恐縮そうに首を横にふることしかできなかった。いつか何もかもが自立したときにはそのような親戚たちに真正面から反抗してみようか、と計画することもあった。しかし一時の我慢で争いが起きないなら、いつも顔を合わせるわけでもないので平気だった。幸江は亡くなる直前までおしゃれをしてヤマブドウの蔓で編んだ鞆をいつも持ち歩き、冗談を言い笑顔を絶やさなかった。幸江と暮らし始めて一年が短く感じはじめ、梅雨あけ間もなくの蝉も鳴かない夏の始まりに祖母が突然亡くなった。死因は心不全という抽象的なゴチナイ言葉で片づけられ、葬儀までとんとん拍子にことが運ばれた。いよいよ樹衣子は独りで生きていくことになるのかと幸江の葬儀の日にだれかが吐いたため息のぬるさを彼は許すことができなかった。彼とは樹衣子の従弟の一人だった。酒臭い親戚の男が悲しむように、その実あざ笑うように言った一言が彼の逆鱗に触れてそのまま男のシャツの襟をつかんで引きずりまわし罵詈雑言を吐き散らした。周りの大人たちが止めに入り彼はタクシーでそのまま家に帰された。樹衣子は別室で祖母の遺体と向き合いながら彼の悲痛な叫びを耳にしていた。時計の秒針がたてる音が妙に気になる深夜的一幕だった。

月日が経ったある日、彼は祖母の暮らした屋敷を訪れていた。かんかん照りの暑い日が続いたあとで彼は何も言わずに屋敷のなかへ上がり込んだ。何も用意できずにごめんね、と樹衣子が目を逸らしながら彼に言った。彼は出された麦茶を飲んで部屋の中で一人黙っていた。祖母の葬儀の日に起こしたみずからの行動について謝罪をするだけのつもりだったのに、樹衣子の寂しそうな背中を見た途端、帰りづらくなった。と言っても幾つもの暗い喪の儀式を淡々とこなした彼女にどんな声をかけていいのかもわからず彼は臉を閉じて畳の上で眠る。もう一人の従弟である冬午郎も同じ日に屋敷を訪れたということは、偶然なのか縁なのか。玄関に彼の靴が揃えてあるのを見て、冬午郎は懐かしく笑っ

てしまった。自分も靴を脱いで壁に刺さった黄土色に錆びた画鋏に帽子をかけて、麦茶を飲みほして寝ている彼を見てまた愉快そうに笑った。その冬午郎の笑い声は洗濯物を干していた樹衣子の耳にも入り、彼女はおかえりー、と大きな声でそう言う。冬午郎もただいまー、と庭を向いてヤマビコのように返す。夏の朝の出来事であり、それは三人が幼いころに過ごしたときと変わらないやりの再現でもあり、祖母の旅立ちを明るく応援する約束のようにも感じられた。

風通しのいい部屋だったから微風にあおられて彼は気持ちよく目を覚ました。冬午郎と彼女は隣室でテレビを見ていた。彼は空にしたコップをもって二人の傍に座り、自分も「火山噴火」のニュースを眺めながら、ポトルから麦茶を注いだ。おはよう、と二人に言われてばつの悪い顔を浮かべながら彼は「ああ」とだけ言った。お昼はそうめんでもいいかしら、ああ、いいね、と三人はそんなやりとりをしながら格別懐かしんだりはしなかった。冬午郎は鍋に水を入れて湯を沸かし始める。樹衣子は庭から葱をとってきて、輪切りにしたまま麺つゆに落として生姜を小さじ一杯垂らす。幼いころから薬味が好物であることはお互いに知っていたからたぷり入れる。彼は濡れた布巾でテーブルをふいて、後は独りでビールを飲んでいた。冷えたグラスにビールを注ぐ音が響いて、サララップをかけて残しておいた出汁巻き卵をつまみにして美味そうに食べていた。冬午郎は湯だった麺の水を切り箸の上に広げる。瞬く間にテーブルに運ばれて三人は手を合わせて、ずるずると麺を吸いはじめる。テレビから甲子園中継が流れて、彼は二杯目のビールを注ぎはじめる。

薄曇りの湖は水面に銀色のひかりを走らせていた。彼は湖のすぐ傍にあるボート小屋の庭に棒立ちしていた。橙色の火がゆらめく。火は憂鬱そうにしばらく新聞紙や枯れ枝のなかで燻り、じわじわと乾いた木片に浸食していた。それからたくさんの本がくべられた。紙片はやがて美しい炎のなかに消尽していく。ページは瞬間的に灰へと変わっていった。メタノールに火を放つとそれはいつまでも燃え続けた。納屋からおんぼろの一輪車をだしてきて本を積んだ。一輪車を押しながら坂を下ることは慣れていなかったから何度も蹴躓きそうになった。冬午郎は朝、一時間ほどかけて入浴をして牛乳石鹸のような匂いを纏いながら彼の煙たい仕事をみつめていた。冬午郎は本当の火というものをあまり見たことがなかったから、興味津々だった。山裾から吹き降りてくる風が火を撫で、その翳を小さくすることもあった。それでも枯れ枝と本の尽きないうちはいつまでも燃え続けた。

彼も神秘的な火の運動に目を奪われていた。彼の鼻先を火の熱波と飛び散った灰がかすめた。彼はまた本をくべた。短い夏が通り過ぎていき、残暑が膜のようにねっとり残り、暑さは蟬の鳴き声のように反響していた。しかし数日前から風の強い秋が麒麟草の開花と共に舞い込んできて、町の人々に季節の変化を予感させた。冬午郎は燃え盛る火にも飽きて、山あいを走るクラシックカーを眺めたりもした。愛好者たちの品評会が行われているらしい。それでも冬午郎は彼の行動を黙って目で追っていた。彼は過去と決別するような表情をして動作は極めて素早く無駄がなかった。彼はその後もたくさんの本を燃やし続けた。量としてはさほど多くはない。

「陽が傾くころには帰らないと樹衣子が怒るよ」

冬午郎は催促するようにそう言った。

「すぐ終わるよ」

傘もささずに湖岸沿いの道を歩いていた。火を消してから間もなく、雨が降りはじめると冬午郎の髪を黒々と濃い色に変えていた。毛先が揃い、肌に貼りつく感触が皮膚を通して伝わり、体はじんわりと湿っぽく濡れはじめていた。霧のような雨で呼吸することを遮られるような感覚を味わいながら、沸き立つあえかな淋しさに胸を打たれていた。どこかにまだ太陽の残滓がこの保養地に反射しているのか、明るい雨のなかにひかりの輪がぼんやりと浮かぶ。虹のような多彩な色のひかりはどこかに導くように破滅的に反射してそれが瞳の中にできた錯覚なのか現実のひかりの屈折なのか判別することは難しかった。樹漏れ陽は灰色の雨をきりわけながら、ひかりの柱となって微細に湿った黒茶色の土を温めていた。

雨風で錆びてしまった商店の看板に炭酸飲料水の絵が描かれてあった。一昔前のアイドルが色褪せた肌の色を晒して、こちらに無垢な笑顔を向ける。二人は喉に粘膜のような詰まりを感じて何かを飲みたい衝動に駆られながら、小雨のなか立ち尽くしていた。ひかりの輪は消え入り、視界はまつ毛から滴る水滴でぼんやりと曇る。湖の方を見れば波はシーツのなかを鼠が走っているかのようになり、不規則で動的な動きをあちこちで繰り返していた。湖そのものが一つの生き物のようにも感じられた。坂の上の屋敷に帰っても湿った畳で横になるくらいしかやることもない二人はトタン屋根で覆われたバス停で雨宿りをした。冬午郎は真新しい白いウールのタオルを鞆から取り出して彼の頭を拭いてやった。彼は猫のように目を瞑りながら雨音に甘美な時間を重ね合わせて柔らかな生地のかなかに抱かれていた。冬午郎は彼を拭いたあとのタオルでわずかに自分

の体を撫でるように拭いた。雨は勢いをまして容赦なくトタン屋根を叩き、会話すらできないくらい五月蠅い音を立てている。時刻表は湿気でグニャグニャに萎れており、コーラの空き缶が暗い小屋の隅に転がっていて、一匹の蟻がベッチの上を右往左往しながら這っている。物資輸送のトラックや伐採業者たちのワゴン車が水たまりを切り裂きながら速度を上げてバス停を通り過ぎていく。ガードレールの下の浜辺には誰かが作った砂山とプラスチック製の赤いスコップが置き去りにされていた。

樹衣子はカーテンを閉めた昏い室内で雨粒の音に耳を預けてルノワールの画集を眺めながら眠ってしまった。ルノワールという画家に興味を持ったことはなかったが母の遺品を整理していた時に見つけたものを不意に思い出して眺めていた。ひんやりとした部屋のなかで微睡みながら夢を見ていたことは憶えているのに、内容は思い出せなかった。ソファに深くもたれながらどこかで雨の音を聞くことの心地よさにロッシーニの楽曲を聞いているような明るさを重ねた。後頭部がまだ水に浸かっているように重たかった。祖母は亡くなる直前まで快活に暮らし、泣き虫だった自分とはぜんぜん似ていなかったなと樹衣子は過去のことをめぐらせる。それでも指がみずからの手首を何気なくつかんだときに、他人の肌に触れたような思いがして自分のことを忘れそうになった。祖母の肌に幼いころ触れたときには自分の分身に触れたようにも感じ、落ち着いたことを思い出す。ぽっかりと口を開けて瞼の内側にぬくもりがあるような気がしてそれが祖母の面影のような気がして眠りのなかにまた逃げようとする。もともと彼と冬午郎と樹衣子はべつべつの両親を持つ従妹の関係にあたり、幼いころはこの祖母の家であった湖岸の屋敷で夏休みを共に過ごしていた。彼はあの頃から物静かで当時すでに故人であった祖父の書斎の窓をあけて木々を揺らして入ってくる風を受けながら祖父の文学全集などを読み耽るような成熟した雰囲気を持っていた。二つ歳下になる彼を樹衣子は少し尊敬していた。籐椅子に座る彼のもとへ麦茶を運びにいったこともあったが彼は集中して扉をあけたことにも気が付かず読んでいることが常だった。冬午郎もあまり賑やかな性格ではなかったが蝉取りやボートなどを楽しみ、初日から顔を真っ黒にして帰ってきていた。親元から離れ束の間、三人は祖母と溶けるような夏の日々を過ごしていた。時間と共に関係は消え去っていくことぐらいは幼いながらも三人とも予感していたはずなのに、またこうして三人が同じ屋敷で寝泊まりをしているというのはあの夏の日がこれからも続くという証左かもしれない。

「何もかも焼却してしまえばすべて消え去るわけではない」

なだらかな傾斜が山に向かって伸びていて、湖を背にして二人はバス停から屋敷へ戻るために歩いてきた。雨は止んだばかりで土はぬかるみ、濁った色の水たまりがあちこちにできていた。凸凹道だったため、靴に泥が付く、二人は生ぬるい湿気のなか地面を見て歩いていた。ふと正面から帽子をかぶった登山者のような男が下りてきて、彼の耳元でそっと囁いた。彼は男が夢の中にでもいるのかもしれないと相手にしなかったがふと漂ったその男の吐息に重なる感覚が胸の奥底にみつきり、はっとある名前を思いだした。

草壁という苗字の男が親戚にいたことを彼はその屋敷を訪れてからすっかり忘れていたし、坂道を登りながらふいに帽子をかぶった男がこちらを見ていることに意識を向けるまでは二度と思い出すこともなかったのかもしれない。肌になまわりつく黒い油のようなその印象。まぎれもなくあの晩にため息のような一言を漏らした男であり、凝った記憶からその相貌が浮かび上がった瞬間、虫唾が走り悪寒がした。爬虫類のように舌を出す癖を持つ五十代半ばの印象の薄い男で、彼が祖母の葬儀の日に引きずり回した男と言うのがこの草壁にあらる。草壁はめったに親戚と付き合うことはなかったが葬式には必ず訪れる男だった。親戚中から格別に忌み嫌われる存在でもなかったがあまりこの男と話をすることもおらず、何を考えているのかもわからなかった。彼はその視線の正体をつかんだ途端に振り返って見たが竹林の笹が風に揺れるだけでだれも立っていないかった。

エプロンをした樹衣子が包丁の先を見つめながら、籠いっぱいの野菜を切っていた。川の水で冷やされた野菜には光沢があった。棚橋さんのお宅から分けてもらったの、と樹衣子は言った。彼と冬午郎は顔も知れない棚橋という人に感謝をした。濡れた服を着替えてから冬午郎も手伝った。彼は居間で新聞を読みはじめた。鍋は沸騰していて、下茹でした大根の匂いがほんのりと香りだす。茹でたジャガイモはへラでつぶされて各種調味料と混ぜられる。冬午郎は手羽元をフォークで刺して火の通りをよくする。樹衣子は葱を大きめに刻む。樹衣子と冬午郎は会話もなしに役割分担をして手早く調理していた。瞬間に手羽元と大根と卵の煮物、それから味噌汁、ポテトサラダがテーブルに並んだ。彼は瞳を丸くして湯気の立つおかずや汁ものを眺めた。いただきますとそれぞれが手を合わせるとすぐに箸がつけられた。彼は食事をしながら、樹衣子をそっと見た。樹衣子はそれに気が付いて不思議そうに彼を見つめる。彼は視線を逸らして――誰か、おれたち以外に客が来なかった？ と尋ねた。樹衣子

はすぐに首を振った。彼は——この煮物、美味しいな、と言った。冬午郎は嬉しそうにした。樹衣子は彼の質問を気がかりに感じていた。

掛け時計の針が夜の九時を指す頃、樹衣子は離れの風呂場に行ってしまった。冬午郎は皿を洗い、彼は冬午郎の洗った皿をつぎつぎと拭いて食器棚に並べていった。皿を全て洗った後、年季の入った薬缶で湯を沸かした。冬午郎は、疲れたから先に休むと言って寝室に向かった。彼はスポーツニュースで欧州リーグでの日本人選手の活躍を目にしたが、草壁のことを考えていた。あの日、生ぬるい感触が襟元にまで昇ってくるような心地がして、あの男を庭先に引きずり出して殴る蹴るを何度も繰り返した。みずからの暴力性に呆れながら、容赦なくあの男を殴り続けた。幼いころには旅行がてら彼の実家を訪問したあの男を連れて八幡宮に案内をしたこともあった。優しいおじさんでしかなかった草壁がいつの間にか人の不幸にたかる蠅のような男になってしまった。元々そう言う男だったのかもしれないが彼にとってはどうでもよかった。親類の者からはあいつは樹衣子に惚れているのでは、でなかったら（草壁）孝六にあそこまでの仕打ちはしまいだらうという噂までされてしまった。あの一夜以来、樹衣子と二人になることが気まづく、樹衣子のことをどう思っているのかわからなくなってしまうていた。昼間のあの顔を見た瞬間に胸倉をまた掴んでやればよかったのに、自分はこの男のことを忘れていた。憎しみの一過性。そんなものなら初めから持つべきではなかった。

ぴいっとけたたましい音が鳴った。彼は急いで台所の方へ駆けてみると台所でしゅうしゅうと蒸気を吐く薬缶があった。ことごと蓋を鳴らして吹き零れている。彼は火を止めて、澄んだ空気のなかに立ち尽くした。ここで茫然としていると何だか浄化されるような心地さえした。コンロの火を消した瞬間に火葬場のことを思い出した。それは誰の火葬なのかも分からない。火と骨の乾いた感覚。昼間の火には見えなかったのに、いまは一瞬立ち上った。窓の外の林には鳥や四足獣、虫たちの息を殺しながら蠢きあっているような独特の気配で充滿していた。三人は別々の部屋で未来のことを想像する。ここにいつまでいるか、だれがここを出ていくのか。それはわからないが朝が来るまでゆっくり眠ればいいと、彼は電気スタンドを消して考えることを止めた。

真夜中に冬午郎は目が覚めて牛乳を飲むために台所へいくと、薄青い翳が食器棚のガラスに映ったような気がした。祖母がまだ自分たちを見ているかもしれないと思った。最後に祖母に会ったのは理学療法士の専門を卒業したばかりだったから、二年前になる。金沢の病院に勤めることになって、しばらく会え

ないだろうと思ひ幸江と樹衣子に挨拶をしに来たときだった。一晚泊り、三人で出前の寿司を食べながら談笑をした。別れ際に二人と握手を交わした。「がんばれよ、若者、愛は海よりも深く、山よりも険しい」と幸江が言った（当時、好きだった女の子と別れたばかりだった。もちろんそんな話は二人にはしていない。見透かされていたのだ）。幸江の手は柔らかく皺だらけでお香のよくな匂いがいつもしていて、樹衣子はお香の匂いがするとおばあちゃんの匂いだと幼いころによく言った。それをみつけるのは樹衣子がいつも三人の中で一番早かった。幸江と樹衣子のことを考えながら、台所をうろろすると冬午郎は懐かしい絵をみつけた。画用紙いっぱい巨大な怪鳥が描かれた不思議な絵だ。額縁に飾られて食器棚の横に架けられてある。樹衣子が高校時代に油絵で描いたハシビロコウの絵だった。クチバシと目が大きくこちらを睨みながら沼のなかで立っている構図だった。二年前にも見た絵だった。なぜ彼女がアフリカに生息するこの奇妙な鳥を描いたのか分からない。色褪せた家具が並ぶこの古い家で灰色の鳥は静かに息を潜ませていたのだった。それからしばらく牛乳を飲みながら深夜のハシビロコウと向かい合う。民家も少ない土地なのに、切り裂くような救急車のサイレンが聞こえた。冬午郎は一気に夢から覚めたような気にさせられる。薄青い翳はもう消えていて、冷えた牛乳が喉を下る。冷蔵庫の稼働音が消えて静けさがまた打ち寄せる。彼がもう一度眠りについたとき、幸江と樹衣子とハシビロコウが夢に登場した。

幸江は死ぬ直前、樹衣子に人差し指の伝達をよくしていた。声がでなくなり、仕方なく幸江は他の大人たちとは筆談を交し合い、樹衣子には戯れから人差し指で掌に伝えたいことをなぞった。はじめてこの宮ヶ浜にやってきたとき、幸江がさすってくれたあの肌の感触が思い出された。まるでなぞなぞのように幸江は微笑みながら、幾つかの単語を走らせて樹衣子を困らせる。樹衣子は幸江と肌を触れあわせているだけで嬉しく、自分の掌になにかをなぞられるとき、不思議と魔法をかけられるような心地がして、幸江の人差し指が通った肌の表皮にはひかりが浮かぶようにさえ見えた。

彼女は非現実的な夜の世界の入り口に佇んでいた。それはまだ彼女が入ったことのない結晶化された時間の畔でもあり、そこから無数の船は出航していたが風は吹いておらず、浜辺には幾つもの機械製品とそれを繋ぐコードが漂着していた。既視感が初めて見る雲平線に生まれるも、瞬く間に薔薇色の火が幾つも上空に浮かびはじめ。結晶の内部に煙か水のようなものが白色から淡い紫色に変化しながら充満する。その礎に彼女の懐かしい皮膚の感覚が担保され

て、黄土色をしたあの男の肌が瘴気を纏いながら覆いつくす。そこで草壁をぼこぼこにしてしまった彼と言えば船の垂直棒に凭れながら、本は焼かれ文字たちは失われたまま、その感触を手のひらに思い出そうとしていた。彼の人差し指は祖母のように触れたものをひかりで満たすことはなく、その体温だけが火のように熱く残っていた。彼はまだその人差し指を縦横無尽に駆使しながら、瞬間ごとに消えていく文字を書き連ねていく。いつまでもその意味のことを必死で追いかけてながら、他の身体感覚のすべてを忘れて彼女もその手に消える文字のことを声で再現していく。何度それが反復されていったのだろう。彼女がその意味を取り違えてしまったのか彼が火のような指の温度に自制心をなくしてしまったのか、詩のような言葉が無限に連鎖していく。

木々や人の影が濃く映る日の昼間だった。門戸の呼び鈴が二度鳴らされて、訪問者が訪れることを知らせると三人とも表情が曇った。冬午郎が真っ先に立って迎えるとそこにいたのはやはり草壁だった。土色の皮膚をして帽子に顔を陰らせながら、男は微笑んでいるつもりだったのだろう。冬午郎はお辞儀をして草壁を迎え入れて、丁寧に挨拶をした。でかくなつたな、と冬午郎に一言かけた草壁は肩をぽんと叩いて屋敷の中に入ろうとする。

「待ってください。樹衣子がまだ具合が悪くて、お会いできません」と冬午郎はそう言うも、ならば尚更、会わなくてはならないだろうと草壁は言い、千鳥足のような歩き方で玄関の扉を開けようとする。冬午郎は精一杯止めようとするも開かれた扉の向こうには彼が仁王立ちをして待っていた。お前も来ていたのか、と草壁は冗談めかしながら笑い、お前にも用はない、というように無視してさらに樹衣子の元へ向かおうとする。待て、と彼は草壁の肩を掴んで力で草壁を阻止する。草壁が彼を睨んで言う。お前ごときが樹衣子の何なんだ、結婚でもするのか。草壁は腕を振り回し彼の手を払いのけて、陰気な敵意の矛先を彼に向ける。彼は息を乱しながらも冷静に振る舞うことに意識を集中させる。自らの輪郭を確かめるように髪を触った。蒸気のように舞い上がる本能を抑える。すでに唇の端から彼は臙脂色の血を流していて、血痕は三和土の上に数滴作られていた。彼はいつの間にか自身の唇を噛んだのかもしれない。草壁はそれに驚くこともなく、倍旧の冥い平静を手繰り寄せていた。樹衣子は薄暗い室内で籐椅子に座り一点を眺めていた。

樹衣子の母であった塔子は亡くなり塔子には君実子という妹がいた。草壁は現在、君実子と暮らしている。君実子は彼の母にあたり、草壁は義理の父にあ

たった。君実子は旅行鞆をクルマのトランクから降ろして、眉間に皺を寄せながら屋敷の入り口の間答を見つめている。

君実子は近づいてきて草壁に声をかける。この子たちにはこの子たちの生活があるのよ、邪魔しないでおきましょう、もういい歳なわけだし、わたしたちがこの子たちぐらいのころにはもう大人ぶったことをたくさんしていたんじゃないかしら。秋晴れの青い空、コスモスの茂みから現れた見知らぬ猫が君実子の前を通って、小さく鳴いた。君実子はその猫を見つめた後、草壁に向かってもういいじゃない、という顔をする。猫はそのまま落ち葉だらけの排水溝を潜って屋敷の外に去っていく。草壁は君実子と外国で暮らすため、樹衣子も一緒に連れていきたかったようだった。それは草壁と君実子が帰ってから樹衣子から聞いた。草壁にとっても樹衣子は大切な存在だったらしいことが分かって彼は釈然としない気持ちになった。外国っていったいどこなのか、と冬午郎が尋ねたとき、ハンガリーの首都ブダペストらしい、と彼が言った。彼は君実子からそれを聞いていた。樹衣子は窓辺に立って湖を眺めながら、少しずつ話しはじめた。

わたしがある年齢に到達するまでは母も元気で父もフツウのお父さんでわたしたちは時間を共に過ごしながらそれぞれの糸を持ち寄ってそれでコウフクに満ちた一つの刺繍を作っていたの、カゾクというジャンルの作品でニチヨウビにそれは作られた、手巻き寿司のパーティー、運動会、遊園地、ファミリールストラン、家族旅行で行った美馬牛峠、とんがり帽子のような小学校の校舎、食べかけのラスク、誕生日プレゼント……。でも刺繍は失敗することになる、母の糸が切れてしまったから、糸がもつれてしまったのかもしれない、と彼女は言った。

——糸？

——そう、色彩の感覚はあらゆるものに宿るの

いま、わたしたちの、時間は、灰色のフィルタに、わ、かけられて、しまっている、わ、愛液も、破壊も、弛緩も、その言葉が持っていた、の、意味をなさない、の、色の感覚が、脱色されて、抜けきった、の、明度しかない、黒と白、の木立、ボーダーシャツ、シマウマたち、牢獄の窓に落ちる陽ざし、鮎色の写真、未曾有の混濁、ドリンクバー、シャワー室の床、斜面、排水溝の音、

彩られているの、それは時間が、というより、発明によって、膠着した、男女のやりとりが、恥と言うよりは、つまらないプライド、栓のないラムネ瓶、瓶底のビーダマ、水晶、その中に燃える薔薇色の水煙、乳白色と門限、既視感、蓋のない紙芝居、岸边、放り込まれた、飲み込まれた、わけではなくて、包囲された、彩られた、器、花瓶、お椀、水音が告げる、雨の音、屋根からの、ひかる、重ねられた、ルージュ、塗りなおされて、強調された、オタマジャクシ、音楽、ハレーション、残響に、包まれて、雑踏に、追いかけて、その、あの、指がくれた、亡くしてしまった、感覚、と傘、クジラの骨、と長靴、それから打楽器の、アンサンブル、めくるめく衣擦れの音、溢れる色彩、と夕立、殺された、蹴られた、書き直された、手紙、原稿用紙、紙屑と屑籠、もぎとられた左腕、ゆくすえ、なりゆき、数本の葉巻、角砂糖、を、吸いながら、林檎の蜜、残された琥珀の、炙られた、肋骨、ペンダント、幼かった混血の娘、それから嫉妬、黄金の声に、よりそった、薬指をはじめとする、いくつかの羅紗と、また約束、小さじ一杯の憂鬱

三人はダイニングテーブルに座っていた。陽ざしは部屋を斜めにきりこんでいて樹衣子の唇から下を明るくしていた。年老いたホロホロは樹衣子の足元で眠っていた。目を閉じていただけかもしれない。十月になろうという頃なのに三人とも真夏のように薄着をしていた。樹衣子は梨を剥きながら、彼に向かって気になっていたことを聞いてみようと思った。そのとき彼はめったに吸わないう煙草に火をつけて視線を宙に漂わせていた。

「子供の頃にあんなに本を読んでいたのに、もう読むことをやめてしまったの？」

彼は異世界から還ってくるような間をとった。それから不思議そうな顔をした。何気なく頬杖をついて憂色そうな顔を浮かべて目を逸らした。

「理由なんてないのだろう。単純に煩わしくなったんだ。だから書斎の本もみんな燃やしたのかもしれない」ポカリスウェットの缶に吸殻は落とされる。

「なぜ、燃やしたの？ 燃やしたらすべてが片付くの？」

彼の煙らせる煙が彼の不機嫌を象徴しているように意地悪くねっとり流れた。冬午郎は樹衣子の視線と彼の煙に挟まれて息苦しかった。

書斎の本は祖父のもので祖母は祖父が亡くなったときのままにしていたのに、彼は祖母が死んでからその本を燃やした。何か意味があるような気がしてならなかったけどそれ以上詮索することは控えた。大きく剥いた梨を彼女は彼

と冬午郎の皿に取り分けてやった。そのとき、屋敷の呼び鈴がなり、樹衣子はすぐに玄関の扉を開けた。赤い帽子をかぶった女が息を切らして立っていた。

女は君実子だった。

「君実子おばさん……」君実子は倒れこむように樹衣子の胸にからだを預けた。面食らった樹衣子は君実子を支えながら「どうしたんですか……」としか言えない。君実子は意識と呼吸がどんどんずれていくことを自覚しながらも上手くしゃべることができない。それから涙がぼろぼろと流れて、地面にしゃがみ込んでしまった。時折少女のようなどころがあると思っていたけど、樹衣子はこういう大人をどう扱っていいか分からなかった。一緒にしゃがみ込んで背中をさすってやると樹衣子はやっと君実子の声を聞き取ることができた。「草壁がいなくなってしまった」そういつて俯いた瞬間、君実子は赤いベレー帽を地面に落としてしまう。樹衣子はそれを見て俯いたから帽子が落ちてしまったのか、それとも帽子が落ちたから拾おうとして俯いたのか、何だか分からなくなるような一瞬に見舞われてそこにまた林から吹きすさぶ風にみずからの髪をなびかせて夜の街道に一人立ち尽くしてしまふような心地にとらわれてしまふ。目の前の君実子は石になってしまったようにかがみこんだままそこを動くともせず、闇の一点になってしまい、先日あんなにも気丈に振る舞えたひとがどうしてこんなに動揺してしまうのだろうと、樹衣子は恋愛と呼ばれるようなあいまいな感情が憎くてならなくなかった。かりそめの浮ついた感情で迷惑をこうむるのは残された人々に他ならない。自分勝手な父親を持って泣きたいのはこっちの方だと樹衣子は逃げてしまいたくなくなった。闇黒の空は低いのか高いのかも分ならず、路地の明かりはなぜか消えていてどこか迷宮のようであるまま、わたしも何もできずにしゃがみ込んでしまふのだろうかと思った。幸江とその夫が引き起こした恋愛が数えきれないひとに困惑を与えているような気がして樹衣子はやはり胸が痛くなった。柘榴のような色をした感情のひとつひとつが結びつきあい離れあい、そして別の実と結びつくのはもう見るのも嫌だ。足音を聞くのも嫌だし、電話の音も、窓をたたく風の音も怖くて仕方なかったのだ。わずかに安心できたのは幸江の皮膚の感触だけだった。あの日ときだけがヘイワのなかにあるような、でも……。

彼女はマネキンのように硬いからだを座席に預けて、人がいないのをいいことに寝そべるように座っていた。樹漏れ陽がバスの車内に入り込み、それは絶えず流れ消え去って行った。温かい息がかけられていることに気が付いて、彼女は彼の膝の上で眠っていることに今になって気づいた。彼も血色のいい顔を

して座ったまま眠りについていた。真上に顔があつたからその息が彼女の首元にかかつていたことに今になって恥ずかしくなつてしまつた。昨晩来ていた服と違う服を着ていて、当然あの女——君実子——も周りにはいなかった。いったいどこに向かつているの？ と「近江八幡の駅だよ。今日はデートをしよう」彼は目を瞑りながら、半覚せいのまま応えた。彼女はそのまま彼の膝の上から、一番近くの窓から走り去っていく宮ヶ浜の景色を眺めていた。中学校の頃に避妊のことを習つて、そのまま貧血を起こして保健室で目覚めたときと同じ感覚がした。温かい息はいまだに首元にかげられたまま、彼女はもう一度ここで眠つてもいいと思ひ始めてその半覚せいの世界を彼と共に味わつていた。そのとき、信じられないことに彼が悪ふざけなのか、寝ぼけているのかその唇を彼女の唇に中てて無数の樹漏れ陽を浴びながら車内で二人はキスをした。彼女はこんなことをしてしまつてはまずいと思つていたのに、金縛りにあつたように体が動かさず粘性の強い彼の唾液を唇でどうやって処理するのか、戸惑いながらそのまま座席の下にたらししてしまい、二人はだらしなく頽れてそのままの時間を過ごしてしまう。こげ茶色の毛を持った肉牛が窓の外で放牧されているのが一瞬見え、牛に見られてしまつたようで恥ずかしかつた。彼は唇を預けながら何かを彼女の手に書いていたようだった。それは幸江の指の感触以来の優しい温かさを持つていた。彼は鼻がつまつているのか呼吸しづらそうだった。樹衣子はずっと生き物を抱いているような、毛布を重ねて布団に籠つていく心地のなかにいた。待つている人がいなかったから停留所が止まらずに過ぎていき、色づいた紅葉の林から少しずつ街並みに代わる頃、二人はしゃんとして真つ直ぐ目の前を向いて茫然としていた。口の中が気持ち悪かつた。それが気づかれたのか彼は鞆からボルヴィックを出して彼女に渡した。気まずくて何もしゃべることができなかつたし、さきほどの行為よりも彼が口をつけたボルヴィックを飲むときの方がよほど緊張してしまつた。二、三かあるいはもっと前の停留所からこのバスに乗り込んだ老婦人が退屈そうにしていて、ふいに後ろを振り返つてまじまじと彼と彼女を見つめた。

「あなたたち、二人はきょうだいかしら？ 茶色い瞳がそっくりね。綺麗よ」と言つた。彼と彼女はこの老婦人に何もかも見透かされてしまつたような気がして頬を薄桃色にして「違います」とだけ言つた。

中継駅となつているため僅かに栄えた街でも平日だつたからすれ違う人は少なかつた。二人は駅前のショッピングモールにとりあえず入つて家具売り場をうろうろしたり、寝具を見たりした。特に買うつもりだつたわけではない。そ

こにはつまらなそうな顔をした店員がいるだけだった。それからシネコンの上映中の映画を一通り確認したけれど二人にとって観たいものはなかった。疲れて大きめのベンチに腰を降ろしオランジーナを飲んだ。彼は小さくゲップを漏らした。

「静かな街だな」

「宮ヶ浜に比べたらだいぶトカイよ」

午前中で学校が終わったのか、ちらほら高校生たちが歩いていった。アイスクリームやハンバーガーを食べたりして楽しそうだった。彼は立って近くのハンバーガーショップでベーコンとレタスとチーズが入ったのを二つ買ってきて彼女に渡した。昨日は母さん（君実子）が迷惑をかけた、すまないと彼は食べながら言った。わたしはどうしてあなたの膝の上で寝ていたの？ 昨日からお前はおかしかった、母さんと接触してから意識がどこか遠くにいつてしまったようだった。冬午郎が母さんを看ててくれるというから、おれはお前にどこか気分転換に連れて行ってやることにした、お前は生返事ばかりで特別「嫌」とは言わなかったからここに連れてくることにした。他に行くところも知らないし。そうしたらお前は、バスの席に着くなり眠ってしまったんだ。いくらゆすっても起きないからおれはお前を放っておいた。後のことは憶えているだろう、と彼は照れ臭そうに言った。彼女はハンバーガーを一かけら口に入れて、ありがとう、と棒読みで返した。彼は憶えているか？ と言った。あのバス内での行為を反芻しようというのかと彼女は怪訝な目で彼を見ると、彼は違うんだ、もつとずっと前に幼稚園ぐらいの頃、このあたりの公園でお前の両親とおれの両親と一緒にお前とおれを連れてこの街にやってきた。ビニールシートが風に舞いそうになるのを一緒におさえてアルミホイルで包まれたお握りを食べたりしたんだよ、彼女はそのときの光景をぱっと思ひ浮かべた。でもその景色が想像なのか追想なのか、区別がつかず彼女は彼に凭れて、もう帰ろうよ、と小さくいった。宮ヶ浜駅のバスに二人が乗り込んだとき、また雨が降ってきた。

二人は雲行きがどんどん怪しくなっていくのを眺めながらまた無言に戻っていった。車内はまるで干からびたプールの底のように空虚に感じられた。いくつかの停留所が過ぎていき、いよいよ屋敷に近づいたとき、この世の終わりのような雨が降り始めて世界を混沌に引きずり込んだ。傘を持っていなかったのにいつもの一つ手前の停留所で降りようと彼女が言い出して、二人は雨が降るなかその停留所で降車した。停留所に小さなビニール傘の忘れ物があったか

ら、彼はそれをさして、半ば自分は濡れながら豪雨のなか二人は歩き出す。彼女は今になってやっと愉しそうな顔を浮かべて、何かをしゃべっているが彼は聞き取るとは全然できなかった。彼は大きく指さして彼女にある場所を見つけたことを告げる。湖岸に東洋風の四阿が建っていた。二人は増水して濁った湖を眺めながら椅子に腰を下ろした。肩を並べて座った二人は地球最後の日を愉しむ老夫婦ように見えたかもしれない。こんな天候なのに車は猛スピードで走り去っていく。彼女はガーゼのハンカチで顔を拭いながら、ここも変わっていないいわね、と小さく言った。彼は前髪で表情を隠しながら、沈黙のなかに逃げ込み、砕け散る水波を目で追いかけていた。時間から切り離されて一つの点になったような感覚が濁流の音にまぎれて二人の元へ打ち寄せてくる。お前はそんな頑固なところがばあちゃんにそっくりだ、と彼女は言われたとき、悪い気はしなかった。やがて雨は止み、雲の隙間からひかりが落ちてきて、彼と彼女は濡れのまま、四阿の片隅で新しい世界を迎える。おい、と遠くから冬午郎の声がする。孤島にでもいるような気分から我に返った二人は冬午郎が振り返った先の急な坂道を下りてくるのをお揃いの茶色い瞳に映す。それが二人の今見ている景色だった。